



研究フォーラム

# 国を超えるグローバルな支援と包摂

チェン ティエンシ  
陳 天璽

民博 先端人類科学研究部

国際社会における情報化の進展にともない、国家間の境界も曖昧なものになっている。国という枠組に従い、当然の権利として認識されがちな「国籍」だが、その法制度の狭間には帰属すべき国籍をえられない「無国籍」の人びとが多くいる。ともに時代を生きる者として、無国籍者の現状と支援のあり方を見つめなおすシンポジウムを開催した。

## 国籍の構造への問い

オリンピックにしても、パスポートにしても、そして毎日見るニュースにしても、わたしたちが生きている社会、そして物事の考え方は、国家を基本的な単位としていることが多い。そのため、わたしたちは、誰でも国籍をもっていて当たり前だと思いがちである。世界人権宣言第十五条にも、「すべて人は、国籍を持つ権利を有する」とある。国籍がえられれば国民として選挙権や公務員としての職がえられるなど、さまざまな権利が与えられる。よって、国籍は「権利をえるための権利」であるといえる。国民国家が誕生してから、包摂と排除のシステムは「国籍」を基盤にすることが多くなった。国籍をもたない無国籍者はしばしば見過ごされ、国々の狭間に置き去りにされる。国連難民高等弁務官事務所の推計によれば、現在、世界にはおよそ二二〇〇万人の無国籍者が存在すると報告されている。しかし、実際のところ、無国籍者については制度化された認定方法が整っていない。そのため、その人が無国籍であるか否かの判断はもとより、無国籍者の正確な人数を把握するのは難しいのが実状である。

## 市民と考える

二〇一二年二月二十七日、国際シンポジウム「世界における無国籍者の人権と支援」には、市民が無国籍、ひいては人と法の関係の実態を理解し、先入観や偏見をなくすることが肝要であると指摘された。

午後の国際シンポジウム「無国籍の認定と保護——国際比較と協力構築」では、フランス、タイ、日本から、各国の無国籍認定と保護システムの現状について発表がこなわれ、国際比較をおこなうことができ。さらに、国連難民高等弁務官事務所に於いて難民・無国籍者を担当している法務補佐官、日本に在住するタイ出身ベトナム系無国籍者を支援する弁護士、そして日本生まれの無国籍者を交えて活発なディスカッションがおこなわれた。議論のなかから、日本の行政窓口の現場では無国籍問題に対応できる制度がないために担当者の判断にゆだねられている国籍認定の杜撰さが明らなみになった。現状を改善するため、早急に無国籍の認定制度が構築されるべきであると提案された。

## 国を超えた協力と包摂

シンポジウムが終了してから半月ほどたったころ、シンポジウムのパネリストたちのもとに一通のメールが届いた。日本に住む日本国籍の男性とタイに住む無国籍女性、そして二人のあいだに生まれた子に関する相談だ。男性と女性はタイで出会い結婚をしようとしたが、女性が無国籍であつ



戸籍のない娘を連れ身登録に行く(映画『あなたなしでは生きていけない』より)

——日本の課題——がおこなわれた。前日二六日には、関連事業「みんなばくワールドシネマ」において、台湾を舞台に法的身分のない娘と父の深い絆を描いた映画『あなたなしでは生きていけない』を上映した。このように二日間には、諸地域において無国籍の人びとがいかに暮らしているのか、どのような問題を抱えているのか、そして人と法律の関係性などに関して、映画とシンポジウムをとおし理解を深め、新しい包摂と自律のあり方を、市民とともに考える機会をもった。映画を見た参加者からは、「法は人を守るためにも、排除するために

たため日本大使館に婚姻届を提出することができなかった。そのため二人の夫婦関係はもとより、父子関係が確認できず、男性と母子は日本とタイで離れ離れになっている。家族は日本で一緒に暮らすことを望んでいる。メールが届くと、パネリストを務めたタイと日本の実務家、研究者たちは、メールで頻繁にやり取りし、家族と一緒に暮らせるためにどのような手続きを進めるべきか情報共有、協働作業をおこなっている。国際シンポジウムをとおしパネリストたちが築いた友情と信頼、問題意識の共有が国を越えた協力体制につながっている。今後は、こうした国を越えた支援をとおり、国籍の有無にかかわらず人びとが平等な人権を享受できる「国籍を超える包摂と自律」の新システムがいかに構築できるのかを考えていきたいと思っている。

### 国際シンポジウム

「世界における無国籍者の人権と支援

——日本の課題」2011年

実施日：2011年2月27日(日)

企画・代表：陳天璽

機関研究「包摂と自律の人間学」領域、プロジェクト「支援の人類学——グローバルな互恵性の構築に向けて」の一事業としておこなわれた。国際シンポジウムの関連事業として、前日26日「みんなばくワールドシネマ」において、血縁関係はあるが法的には父娘関係が証明できない父が娘のために法律や行政に体ひとつで対峙する実話を映画化した「あなたなしでは生きていけない」を上映。



通路まで参加者で埋め尽くされた

もあると感じた。「一人に平等に権利を与えない国家のゆくすえは、どうなるのでしょうか」などのコメントが寄せられた。二月二十七日、午前のプログラムである国際ワークショップ「無国籍者の支援の現場——市民社会からのアプローチ」では、無国籍者を支援するタイと日本の市民団体の実務家や無国籍者とともに、支援の現場の実態、当事者の生活や思いなどについて具体的な事例による報告がおこなわれた。タイでは無国籍者を登録状況によって細分化しているのに対し、日本では無国籍者の定義が曖昧であるという実態が浮き彫りとなった。また日本における在留資格のない無国籍者の困窮した日常やストレスの軽減